

単位積み上げ型制度にて学士号取得を目指す看護師  
への学修支援：  
学修成果レポート執筆への効力期待を向上するため  
の対面プログラムの試行

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学通信教育部 公開日: 2023-03-29 キーワード: 作成者: 池口, 佳子, 野口, 普子, 菊地, ひとみ メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2044">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2044</a>

# 単位積み上げ型制度にて 学士号取得を目指す看護師への学修支援

— 学修成果レポート執筆への効力期待を向上するための  
対面プログラムの試行 —

池口佳子・野口普子・菊地ひとみ

## I はじめに

現在我が国の看護基礎教育は、3年課程の看護専門学校や4年課程の看護系大学などの様々な教育課程において行われている。近年の超高齢社会の要請を受け、看護師の職能団体である日本看護協会は、高度な看護実践能力を有する看護師の育成のために看護基礎教育課程の4年制化を目指している（日本看護協会，2022）。しかし看護系大学が急激に増加しているにもかかわらず、2021年度の看護師国家試験合格者の約6割は3年課程の看護短期大学・看護専門学校等の卒業生が占めていた。このような看護基礎教育をめぐる動きもあり、キャリアアップや看護実践能力の更なる向上を目的とした、3年課程を修了した看護師による単位積み上げ型制度を利用した学士（看護学）取得希望者が増加傾向にある。この単位積み上げ型制度を実施している独立行政法人大学改革支援・学位授与機構（以下、機構）によると、学位取得者数は2011年まで年間300人前後であったが、2012年以降は年間450人前後で推移している（独立行政法人大学改革支援・学位授与機構，2020）。これは看護学分野に特化した動きであり、看護基礎教育の4年制化への動きと連動している。しかし、単位積み上げ型制度により学士号を取得した看護師に関する研究は報告されておらず、その実態は明らかになってはいない。

この単位積み上げ型制度によって看護学の学位を申請するためには、大学に1年以上在籍し、看護学の専門領域も含めた大学卒業要件と同等の単位数を積み上げることと、学修内容に関連した約1万5千字程度の学修成果レポート（以下、レポート）を機

構に提出する必要がある。その上で、学修成果に関する試験に合格しなくてはならない。単位積み上げ型制度によって学士号取得を目指す看護師には、このレポートを執筆することで、看護学に関するある事象に関して文献を用いて多角的な視点から捉え、自らの考えを論理的に記述することができる、学士としての能力を身に着けることが期待されている。

しかし、研究者らが実施した単位積み上げ型制度により学士号取得を目指す看護師に対する支援ニーズ調査（菊地・池口・野口，2021）においては、申請時の煩雑な手続きとレポートに対する不安や苦手意識が強く、レポート執筆に関する学修支援の要望が高いことが明らかとなった。

一方、働きながら学位取得を目指す看護師は、単位を積み上げるために科目等履修生として大学に在籍し、通信教育を受ける場合が多い。通信教育には、いつでもどこでも誰もが学べることや独立性や自律性が育つというメリットがあり（鈴木・平岡，2021）、コロナ禍の教育現場において急速に拡大した。しかしその特性上、キャンパスに集う機会が少ないため、仲間の存在を感じ難く孤独な側面があり、学習者は学習意欲を維持し続けることが難しく、脱落率が大きいが課題となっている（鈴木・平岡，2021；向後，2020；秋山，2012）。この通信教育の欠点に対しては、スクーリングのような対面授業が効果的であり、仲間の存在を認識し、孤独感を軽減することが可能である（秋山，2012）とされている。

以上のことから、本研究においては、単位積み上げ型制度で学士号取得を目指す看護師のレポート執筆に対する学修支援プログラムを開発・試行するこ

ととした。前述した支援ニーズ調査（菊地・池口・野口, 2021）により、3年課程を修了した看護師は長文レポートに対する苦手意識が高いことが明らかになったため、学修支援対象者のレポート執筆に対する効力期待の向上を図ることとした。効力期待とは、特定のパフォーマンスを達成するための一連の行動を効果的に遂行できるかという観点からみた自分の実行能力に関する主観的な判断である（鹿毛, 2013）。学修支援対象者のレポートを書くことができるという効力期待を高めるために、本学修プログラムでは学士号を取得するメリットに関する外発的動機づけと、その結果として対象者の学士号を取得する意義としての内発的動機づけを強化することによって自己決定的な学修意欲の向上（鹿毛, 2013）を目指すこととした。そのことがもたらす効果として、レポートを書くことができるという結果予想が高まり、レポート執筆に対する効力期待を向上することができる（Bandura, 1995）と考えた。

本研究の目的は、単位積み上げ型制度にて学士号取得を目指す看護師の学修成果レポート執筆を支援するプログラムを開発・試行し、受講生のレポート執筆への効力期待の向上を図ることである。

## II 研究方法

### 〈用語の定義〉

本研究における学位とは、学士（看護学）の学位とする。

### 1. レポート執筆のための学修支援プログラム（以下、プログラム）の開発

#### 1) プログラムの構築

レポートを執筆するまでの期間を半年と設定し、

その過程を3段階とし、講義やワークショップ等でプログラムを構築した。さらに対面コースと動画視聴コースの2つのコースを構築した。本稿においては、対面コースのプログラムの試行について、成果報告を行なう（表1参照）。

### 2) 対象者

3年課程の看護専門学校・看護短期大学を卒業しA大学の通信教育部において単位を積み上げている、もしくは単位の積み上げを修了した学位取得を目指す看護師とし、自由意思において本プログラムの対面もしくは動画視聴どちらかのコースに参加を希望したものとした。ただし、2つのコースとも、3回のプログラムのすべてに参加可能な場合にのみ、研究対象者とした。対面におけるプログラムの開催日は、受講生が交替勤務の病院勤務をしている看護師であると想定し、勤務の調整がしやすいように予め開催日時を設定（日曜または祝日：10～17時）した。

リクルートは、A大学の通信教育の科目等履修生として単位を積み上げている在校生および修了生である研究対象候補者約800人に対し、メールおよびWeb学習支援システムの掲示板において調査について告知し、自由意思において参加を希望する者を募集した。

### 2. 調査期間

2019年9月～2020年2月

### 3. 調査の流れ（図1参照）

3回のワークショップ前後に、無記名式の自記式調査票を用いて実施した。

表1 対面コースの学修支援プログラムの内容

時期	プログラム
2019年 9月	第1回ワークショップ：学位を取得するという事・学修成果レポートの構成・テーマ・文献検索方法
2019年 10月	第2回ワークショップ：課題への個人指導・文献検討・倫理的な配慮・レポートの構成を組み合わせる
2019年 12月	*個人添削（WEB）
2020年 1月	第3回ワークショップ：考察・全体を整える
	*個人添削（WEB）

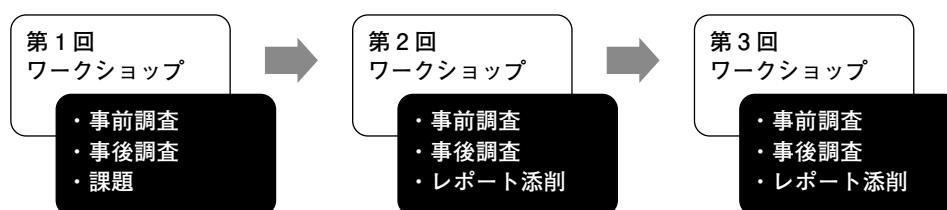


図1 調査の流れ

#### 4. 研究対象者

自らの意思で研究説明を受け、対面コースの学修支援プログラムに参加の同意が得られた者は19名であった。19名のうち2名が3回目のワークショップに参加せず（脱落率10.5%）、最終的に全プログラムをすべて修了した17名の受講生を本調査の研究対象者（以後、受講生）とした。

#### 5. プログラム評価

1) 本調査においては、学修支援プログラム受講前後のレポート執筆に対する効力期待の変化を把握する目的で、「どれくらい書けると思えますか」という問いに Visual analogue scale（以下、VAS）で答えてもらうこととした。図2で示した100mmの線に対し、自分が感じる程度の場所に垂直の線を引いてもらった。得点化の手順は、測定者が定規を用いて0から何ミリメートルの所に線を引いたのかを記録しその数値をVAS得点とした。

レポート執筆に対する効力期待の推移を捉えるための既存の尺度はなく、VASが適していると考えた。また、毎回のワークショップ受講時点のレポートの進捗度、ワークショップの内容に対する理解度や難易度についてもVASで回答してもらった。

受講生の受講前後のレポート執筆に対する効力期待VAS得点（0-100）については、全プログラムの受講前後として第1回ワークショップ受講前と第

3回ワークショップ受講後と、各ワークショップ受講前後のVAS得点を比較した。正規性の検定の後、Wilcoxonの符号付き順位検定を実施した。有意水準は $p < 0.05$ とした。

2) 対面でのワークショップ受講前後に、プログラム内容に関する疑問や意見、感想を自由に記載してもらった。その内容を①～③の方法で分析した。①データを記載された内容の意味ごとにコードに分けた。②内容の類似性相違性より、カテゴリーを作成した。③カテゴリーの内容に相応しい名前をつけた。

3) 1)と2)の結果から、プログラムの効果について検証した。

#### 6. 倫理的配慮

研究者が所属する施設の倫理審査委員会の承認（19-02-04）を得た。研究対象候補者が自由意思で、研究の説明が受けられるように告知を行なった。その上で説明を希望した場合に、本調査について文書および口頭にて説明を行ない、自由意思での参加、途中辞退の機会について保証し、同意書に署名が得られた者を研究対象者とした。また、参加の同意が得られた場合に、3回のワークショップ前後に実施する自記式調査票を紐付けるための番号を付した調査票を無記名の封筒にランダムに封入したものを配

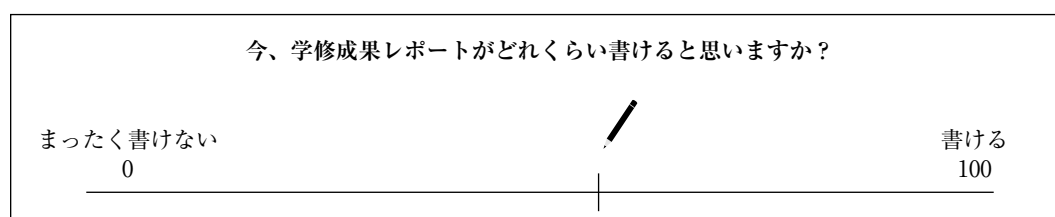


図2 プログラム前後に実施したVASによる調査

布し、匿名化を図った。調査票の回収は、研究対象者が自ら回収箱に投入できるようにし、研究者から研究対象者が特定できないように配慮した。

### Ⅲ 結果

#### 1. 属性

平均年齢：43.3歳（20歳代2名、30歳代1名、40歳代12名、50歳代2名）であり、40歳代が70.5%を占めていた。

性別：全員女性

居住地：東京9名、神奈川5名、長野1名、岡山1名、広島1名、プログラムを開催した関東近辺の居住者が82.3%を占めていた。

職種：看護師13名、保健師2名、無記名2名

雇用形態：常勤13名、非常勤3名、無職1名

職位：管理職4名、スタッフ9名、その他2名、無記名2名

勤務形態：交替勤務3名、日勤のみ12名、無記名2名

家庭内役割：主婦4名、主婦・育児5名、主婦・介護1名、その他・無記名7名

#### 2. 学位取得を目指した理由

「大卒資格がほしい」と回答したものの割合が11名65.4%と多く、次いで「もっと勉強がしたい」と回答したものが9名52.9%であった（表2参照）。

表2 学位を取得しようとした理由（n=17）

理由	回答数	複数回答あり
① 大卒資格が欲しい	11	(64.7%)
② 職場で求められた	0	
③ 後輩の指導をするときに必要	5	(29.4%)
④ 進学のため	7	(41.2%)
⑤ 職位を上げるなど、キャリアアップのため	6	(35.3%)
⑥ もっと勉強したい	9	(52.9%)
⑦ 周囲の人から勧められた	1	(5.8%)

### 3. レポート執筆に対する効力期待の推移

#### 1) プログラム全体を通じたレポート執筆に対する効力期待の変化

VAS得点はShapiro-Wilk検定により $p < .05$ であったため、対応のあるWilcoxonの符号付き順位検定を用いた。

プログラム受講前のレポート執筆に対する効力期待VAS得点（以下、VAS）の中央値は26であったが、全プログラム終了時には71と大幅な上昇がみられた（図3参照）。プログラム受講前の効力期待との比較においては有意差を認めた（ $p < .000$ ）。

#### 2) 各ワークショップ前後のレポート執筆に対する効力期待の変化

プログラム受講前のレポート執筆に対する効力期待を表すVAS中央値は26と低かったが、1回目のワークショップ直後のVAS中央値は52となり、2倍に上昇し、有意差を認めた（ $p = .004$ ）。2回目ワークショップ受講前のVAS中央値は53であったが、2回目ワークショップ受講後のVAS中央値は52と横ばいであった。3回目ワークショップ受講前のVAS中央値は76であり、2回目ワークショップ終了時より上昇していたが、3回目のワークショップ受講後のVAS中央値は71とやや低下した。第2回と第3回のワークショップの前後ではVAS得点に有意な差を認めなかった。

#### 4. レポート執筆の進捗度の推移（図4参照）

プログラム受講前の受講生のレポート執筆の進捗度を示したVAS平均値は10.5であったが、2回目のワークショップ受講前のVAS平均値は27.0、3回目ワークショップ受講前のVAS平均値は64.1まで上昇した。

初回のワークショップ受講前のVASで0と回答した受講生が8名いたが、2回目ワークショップ受講前には全員がレポート執筆を開始し、3回目受講前の最低点は27であった。また、2回目ワークショップ受講前の時点で100と回答した受講生が1名いたが、3回目ワークショップ受講前には81となっていた。

### 5. ワークショップに対する理解度と難易度

#### 1) ワークショップの内容に対する受講生の理解度

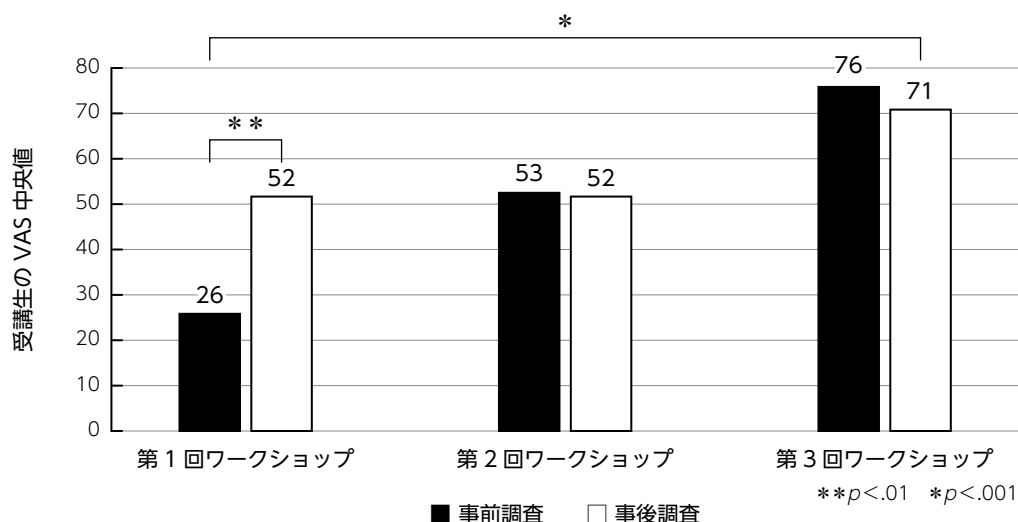


図3 ワークショップ前後のレポート執筆に対する効力期待の推移

を示した VAS 平均値は、1 回目のワークショップの「テーマの書き方」が 82.0、「テーマ決定の参考になった」は 91.1、「資料を探す参考になった」は 83.9 であった。2 回目のワークショップの「結果の書き方」が 54.5、「レポートの構成について」は 62.5 であった。3 回目のワークショップの「考察の書き方」が 68.2、「全体の整え方について」は 74.7 であった。

2) 各ワークショップに対する難易度を示した受講生の VAS 平均値は、1 回目 49.1、2 回目 47.5、3 回目 57.0 であった。

## 6. 各ワークショップ前後の自由記載

ワークショップ前後の自由記載に書かれた内容を

相違性からカテゴリーに分け、そのカテゴリーに相応しいカテゴリー名をつけた。

1) 1 回目ワークショップ受講前の自由記載には、「15,000 字書ける気がしない」や「レポートの構成方法などすべて分からない」「何をテーマにしたらよいのか」といった漠然とした不安が多く書かれており、【長文執筆への不安】【テーマ設定への不安】【レポート作成に関する知識不足】【文献検索への心配】【執筆環境への心配】【倫理的な配慮への不安】という 6 つのカテゴリーが抽出された。しかし、受講後の自由記載では、「サポートへの安心感と良い仲間との出会いで、取り組む気持ちが強くなった」「知識を得たことで書けそう」という前向きな意見

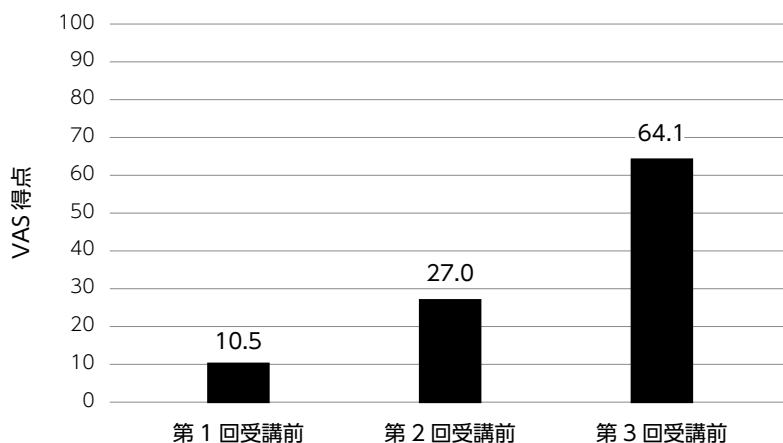


図4 ワークショップ受講前のレポート執筆の進捗度の推移

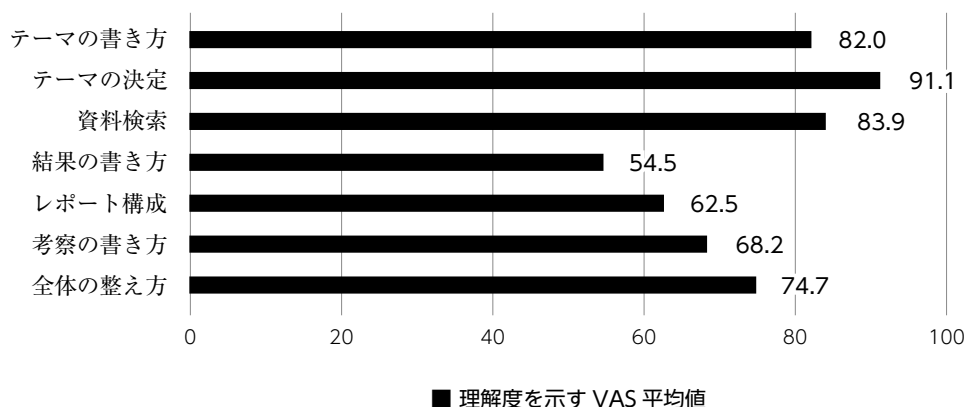


図5 ワークショップの内容に関する理解度

が書かれ、【仲間や講師と語り合えたことによる自己効力感の向上】【知識の獲得による意欲の向上】【講義内容の理解に対する困難感】という3つのカテゴリーが抽出された。

2) 2回目のワークショップ受講前の自由記載には、「グラフ・図が作れるか」「テーマがレポートに適しているか」という具体的な内容に関する不安が多く書かれていた。その結果、【レポートに関する具体的な心配】【テーマ設定への不安】【書くことへの困難感】という3つのカテゴリーが抽出された。受講後の自由記載には、「道が見えてきた気がした」という肯定的な意見と「何を明らかにしたいのかわらなくなった」という迷いが書かれていた。そのため、【レポートの方向性が明確になった】【レポートの方向性に迷いが生じた】という相反する2つのカテゴリーが抽出された。

3) 3回目のワークショップ受講前の自由記載には、「要旨の書き方が分かりません」「最初より不安軽減になった」などが書かれ、【書き進めたことにより生じた具体的な疑問】【書き進めたことによる不安の軽減】【学位申請時の試験への不安】という3つのカテゴリーが抽出された。そして、受講後の自由記載には、プログラム全般に関する感想や意見が書かれていた。その内容は多岐に亘り、「期限があることがとても良い」「手をつけるきっかけとなった」という意見から、【期限のある課題による動機づけ】【仲間の存在】【個別指導による執筆意欲の向上】【新しい知見の獲得】という3つのカテゴリーが抽出された。また、「有料でもこのようなプロジェクトがあるとよい」という今後のプログラムの在り方に対する意見や「申請前にレポートの添削をしてほしい」という意見から、【プログラムへの期待】というカテゴリーが抽出された。

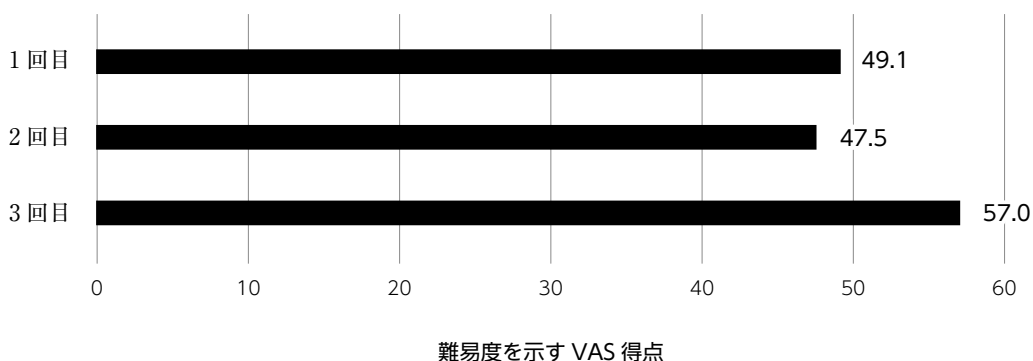


図6 ワークショップの難易度

表3 受講生の自由記載

カテゴリー	データ例（データ数）
<b>受講前</b>	
長文レポート執筆への無力感	15,000字書ける気がしない（5）
テーマ設定への不安	何をテーマにしたらよいのか（6）
レポート作成に関する知識不足	レポートの構成方法などすべて分からない（2）
文献検索への心配	文献の調べ方・引用の仕方（2）
執筆環境への心配	時間の捻出ができるか（3）
倫理的な配慮への不安	倫理的問題に引っかからないか（2）
<b>1回目ワークショップ 受講後</b>	
仲間や講師と語り合えたことによる自己効力感の向上	サポートへの安心感と良い仲間との出会いで、取り組む気持ちが強くなった・話すことや仲間の話を聞き、思考も整理出来た部分がある（11）
知識の獲得による意欲の向上	知識を得たことで書けそう（10）
講義内容の理解に対する困難感	理解がおぼつかなかった部分がある（2）
<b>2回目ワークショップ 受講前</b>	
レポートに関する具体的な心配	グラフ・図が作れるか（2）文献が探せるか（4）
テーマ設定への不安	テーマがレポートに適しているか（4）
書くことへの困難感	書くことが難しい（9）
<b>2回目ワークショップ 受講後</b>	
レポートの方向性が明確になった	グループで話すことが出来て、道が見えてきた気がした（5）
レポートの方向性に迷いが生じた	説明内容は理解出来たが、何を明らかにしたいのか分からなくなった（5）
<b>3回目ワークショップ 受講前</b>	
書き進めたことにより生じた具体的な疑問	考察で言いたいことの文献の見つけ方・要旨の書き方が分りません（15）
書き進めたことによる不安の軽減	一度書いてみたので、最初より不安軽減になった（3）
学位申請時の試験への不安	小論文試験はどのような出題がされるか（1）
<b>3回目ワークショップ 受講後</b>	
期限のある課題による動機づけ	（課題が）手をつけるきっかけとなった（5）
仲間の存在	他の人の意見や視点も聞けることがレポート作成に取り組めるきっかけになった（4）
個別指導による意欲の向上	見ていただけるのは、モチベーションが上がる（6）
新しい知見の獲得	とても参考になった（1）
プログラムへの期待	気軽に、スピーディに質問、トークできる場が欲しい・図書室やPC環境が整うと効率的（2）有料でもこのようなプロジェクトがあるとよい（2）分かりやすい資料（4）申請前にレポートの添削をしてほしい（6）

#### IV 考察

開発した学修支援プログラムについて、受講生の調査結果から検証する。

##### 1. 対面による学修支援プログラムの検証

###### 1) プログラム設定の実現可能性

本プログラムについて、働く看護師が参加可能な

プログラム設定であったかどうかという、実現可能性について検証する。日程については、4月に単位を積み上げて科目等履修生を修了した場合を想定し、学修成果レポートを執筆する期間が半年ぐらいかかると想定し3段階のワークショップを9月・10月・翌年1月の祝日または日曜日に設定した。参加者の募集をする段階で、日時を定めて3回のワークショップ全部に参加可能なことと条件を付して告知した。

また、時間は遠方からの参加も可能な時間として、10時から17時とした。なかには交替勤務や家事や育児をしながら参加した受講生もおり、予め日時を提示したことで、多様な勤務形態をしている看護師でも参加が可能になったことが推察された。

また、本調査の対象候補者は、大学の通信教育にて単位を積みあげた看護師であり、居住地も様々であった。しかし対面ということで、開催地である関東近郊の参加者が82.3%を占めた。しかし、長野、岡山、広島という遠方より新幹線や飛行機を使い泊まりがけで参加した受講生も3名いた。調査開始時に研究参加の同意が得られた者は19名であったが、2名が3回目のワークショップに参加せず（脱落率10.5%）、最終的に全プログラムをすべて修了した者は17名となり、89.5%の完遂率となった。

以上のことから、働きながら学修成果レポートを執筆する看護師にとって、本調査の対面コースの設定（日時・期間・場所など）は、実現可能なプログラムであったとすることができる。なお本調査は、A大学の研究助成を受けて実施したため、無料での開催となったが、受講生からは、たとえ有料であってもこのようなプログラムがあるとよいという意見が聞かれた。このことから、学位取得を目指す看護師の本プログラムに対するニーズはあると考えられる。

## 2) 対面による学修支援プログラムの検証

受講生のレポート執筆に対する効力期待を示すVAS中央値の推移を見てみると、プログラム受講前の26に対して、3回目のワークショップ終了後には71となり、有意に上昇した。受講前の自由記載から、受講生は長文レポートを書くことに対する漠然とした強い不安を抱えていることが明らかになった。このことは、受講前のVAS中央値が26と低値であったことと相関しており、予備調査の結果（菊地、池口、野口、2021）と一致していた。

1回目のワークショップの導入時には、学士号を取得する意義と学士力として身に付けてほしい能力についてのミニレクチャーを実施した。受講後の自由記載においては、【仲間や講師と語り合えたことによる自己効力感の向上】【知識の獲得による意欲の向上】というカテゴリーが見られた。このことから、

受講によって得られた知識や、同じ目標に向かう仲間や学修を支援してくれる講師の存在が、レポート執筆に取り組むため意欲の向上に繋がったと考えられる。レポート執筆は、学位を得るために必要不可欠な要件であり、自律的な取り組みである。1回目のワークショップの受講により、学位を取得する意義を認識する内発的動機付けを強化し、学位を取得するという将来の結果予期を高めることとなったことが推察された。

1回目のワークショップ受講後のVAS中央値が52と受講前の2倍へと上昇したことから、受講生の効力期待は向上できたと考えられる。受講前に受講生が抱いていた漠然とした不安は受講後には見られておらず、代わって【講義内容の理解に対する困難感】という知識の理解に対する難しさを訴えた受講生が2名いた。

2回目のワークショップ前のVAS中央値は53であり、ワークショップ終了直後もほぼ横ばいであった。受講後の自由記載を見てみると、【レポートの方向性が明確になった】【レポートの方向性に迷いが生じた】という相反する2つ内容が浮かび上がった。このワークショップでは、個々のテーマに対するグループ討議および個人指導を行なったことで、「グループで話すことが出来て、道が見えてきた気がした」と執筆に対して肯定的な意見を抱いた受講生と、「説明内容は理解出来たが、何を明らかにしたいのか、分からなくなった」「考察結論をどう落とし込みたいのかが見えなくなった」などと、逆に執筆の方向性が見えなくなってしまった受講生とに分かれたことを示していた。このことは、初めて長文のレポートを書き始めた受講生が、先の見通しを持たずに書き始めたことで、ワークショップでアウトラインを書き出そうとしたときに、逆に【レポートの方向性に迷いが生じた】のではないかと推察された。そのため全体のVAS得点の推移としては、受講前とほぼ変化が見られなかったと考えられる。

また、本格的に書き進めていく段階に入り、講義でレポートを書くための知識を得ても、それを活用しながらどう書き進めていけばよいのかという戸惑いが受講生に生まれたことも考えられた。書くための知は知るだけではなく、実際に書いてみることで理解されていくという特徴があるのではないだろうか。

3回目のワークショップ受講前のVAS中央値は76であった。このことは、2回目のワークショップ終了時に課題が出され、3回目のワークショップ前に提出し添削を受けていることと関連していると推察された。個別添削指導が行なわれたこともあり、2回目受講後より執筆に対する効力期待が上昇したと考えられる。

3回目のワークショップ受講前の自由記載において、【書き進めたことにより生じた具体的な疑問】を訴えた者がいたが、受講後には疑問は書かれておらず、ワークショップにおいて疑問が解決したと推察された。3回目のワークショップ後のVAS中央値は71と受講前より変化は見られなかったが、本プログラム開始前の26に比較すると約3倍と有意に上昇していた。そのため、レポート執筆に対する受講生の効力期待は向上したと、評価することができる。

## 2. 本プログラムの課題

本学修支援プログラムにおいては、3つの課題が明確になった。1つ目の課題は、プログラム内容の改善である。受講内容の難易度を示すVAS平均値は、いずれも各ワークショップ後に50前後であった。難易度はレポートの進捗度とも関連しており、レポート執筆が進むとともに書き方に関するワークショップのテーマに関する理解度は50～60と低くなっていた。学習者のレディネスの多様性も大きいことも推察されるため、今後はより分かりやすい表現や内容での講義や演習を検討する。

また、レポートを執筆するための能力の獲得には、書くための知識を一方向的に教授されただけでは十分ではなく、実際に書くというプロセスを自ら経験することでしか理解が及ばない部分があることを示していると考えられる。そのため、レポート執筆に関する能力を向上するためには、受講生が実際に書いてみるというプロセスをプログラムの中に組み入れる必要がある。

2つ目の課題は、受講生のモチベーションを維持・向上するための交流の場の創設である。終了後、受講生より「気軽に、スピーディに質問、トークできる場が欲しい」という意見が上がった。コロナ禍においては、感染予防対策の観点から、オンラインの座談会やソーシャルネットワーキングサービス（Social

Networking Service; SNS）の拡充などが見られ、家庭におけるインターネット環境の整備が促進された。どこまで講師が関与するかは検討が必要であるが、受講生同士が交流する機会を創設することで執筆意欲を維持・向上する仕掛けとなることが期待できる。

3つ目の課題は、開催時期および開催方法の検討である。受講生には、病院において交替勤務をしている者や、居住地の関係で飛行機を使用して参加した者もいた。そのため受講に際しては数ヶ月前に行なわれる交替勤務の勤務調整を考慮し、予めワークショップ開催日を提示する必要がある。さらに、学位取得を目指す看護師の年代を、キャリアアップを目指す成人青年期から壮年期と予測した場合、仕事のみならず家庭内の役割を併せ持つ者も多いことが推察される。対面だけではなく時間や物理的な距離を気にせず学ぶことができるオンラインやオンデマンド方式などの遠隔授業を組み合わせたハイブリッド型のプログラム構築の可能性が示唆された。この点については、同時に実施した動画視聴コースの結果と合わせて検討する必要がある。また本調査では、執筆段階を3つの段階に分けたワークショップを実施したが、段階ごとのワークショップをレポート執筆の進捗に合わせて受講生が選択し受講できるような仕組みをについても模索する必要があると考える。

以上、調査結果から3つの課題を述べた。しかしながら論文やレポートを書くためには論理的思考力や研究能力、文章作成スキル、パソコンスキルといった基礎的な能力開発が必要になる（向後，2020）。単位積み上げ型制度による学士号取得のための学修成果レポートにおいては、テーマ設定をする能力も求められている。自らが問題を明確化し課題設定をする能力と、さらに根拠となる資料等と照らし合わせながら自らの考えを論じる能力が必要とされる。しかし、看護師がケアに疑問を持ったときに最もよく利用していた情報源は同僚の看護師であり、ガイドラインや論文データベースといった科学的根拠を参照するものは少ないという調査結果が報告されている（二見・野口・山本，2019）。看護学の学士号取得を目指す看護師には、科学的根拠となる知見を活用するための文献検索能力や文献をクリティクす

る能力、その上で自らの考えを論理的に述べる能力が求められているのである。本プログラムの長期的な課題としては、これらの能力を養うことができる学修支援体制の構築である。

### 3. 本研究の限界と課題

本研究においては、学修成果レポートの執筆に対する受講生の効力期待の向上を図るための学修支援プログラムの試行とその検証を行なったが、プログラムの長期的な目的は看護学の学士号取得であり、すなわち学士号取得者としての能力を養うことである。本調査の対象者は非対照群の17名のみであり、レポート執筆後の学位取得状況まで追跡することはできなかった。調査をプログラム終了直後までとした理由は、COVID-19の急激な感染拡大が生じた時期と重なり、機構による学位審査が延期になったことや看護師である受講生の学習環境に大きな変化が生じたことが原因である。今後は、同時に試行した動画視聴コースの検証と合わせて、より効果的で実現可能なプログラム構成について検討する必要がある。

## V 結論

単位積み上げ型制度による学修成果レポート執筆に対する効力期待を向上するための学修支援プログラムを開発・試行した。対面コースにおいては17名の看護師が参加した。最終的に、受講生のプログラム受講後の学修成果レポート執筆に対する効力期待は、有意に上昇した。以上より、対面コースによる学修支援プログラムは、受講生の学修成果レポート執筆に対する効力期待の向上に繋がったと評価することができる。

## 謝辞

本学修支援プログラムは、2019年度武蔵野大学しあわせ研究助成を受けて実施しました。また、調査結果の一部を日本看護科学学会第46回学術集会にて報告しました。本プログラムの開発・試行にご協力いただきました皆様に、深く感謝いたします。

## 文献

- 秋山豊 (2012). 大学通信教育における生涯学習支援の推移と動向, 大正大学大学院研究論集 36, 197-206.
- Bandura, A. (1995/1997). 本明寛・野口京子 (訳). 激動社会の中の自己効力. 東京: 金子書房.
- 独立行政法人 大学改革支援・学位授与機構 (2020). 短期大学・高等専門学校卒業生等を対象とする単位積み上げ型の学位取得者数の推移  
[https://www.niad.ac.jp/n\\_gakui/other/juyoshiryou/1174663\\_892.html](https://www.niad.ac.jp/n_gakui/other/juyoshiryou/1174663_892.html) (2022年9月8日アクセス)
- 二見朝子, 野口麻衣子, 山本則子 (2019). 看護師のクリティカルシンキングと科学的根拠の利用の関連, 日本看護科学会誌, Vol. 39, 261-269.
- 菊地ひとみ, 池口佳子, 野口普子 (2021). 通信教育で学位取得を目指す看護師の学位申請に関する学習支援ニーズ, 第51回日本看護学会論文集 看護管理 看護教育, 151-154.
- 向後千春 (2020). 社会人の学び直し; オンライン教育の実態と課題, 日本労働研究雑誌, 721, 15-25.
- 日本看護協会 (2022). 令和5年度予算・政策に関する要望書.  
[https://www.nurse.or.jp/up\\_pdf/20220420161751\\_f.pdf](https://www.nurse.or.jp/up_pdf/20220420161751_f.pdf)
- 鹿毛雅治 (2013). 学習意欲の理論: 動機づけの教育心理学, 東京: 金子書房.
- 鈴木克明, 平岡齊士 (2021). ICTを活用した授業デザイン原則の提案—交流距離理論の足場かけ総量再解釈に基づいて—, 名古屋高等教育研究, 第21号, 143-165.